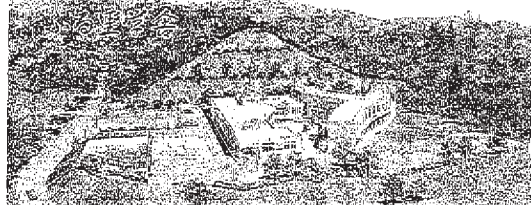


社会福祉法人 佑啓会



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会
〒290-02 市原市今富 1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里見 吉英
編集者 三股 金利

接 点

里見 吉英

「先生、私の子供は三年後どうなるの？」という質問を最近多くの家族の方から聞かれるようになってきました。

学会もオープンして早一年半、もうそんな事が話題にのぼる時期になったのかと改めて感じています。「先生、三年後はうちの子は入れるんですか？」逆にそんな質問をしていくシヨートステイ・ふれあいホームを利用した方や見学者の皆さん。

そんな状況の中で先日、五井グランドホテルにて、家族会と職員研修会、交流会が開催されました。今回はこの一年半の中でふれあいホーム・シヨートステイを利用された方々の保護者の皆さんも含め、百余名という数にのぼりました。

研修会は、古川理事長の「家族と共に」という演題で、知的障害者のおかれた立場、ライフサイクル等、具体的事例の中から含蓄のある講演でした。

知的障害者にとって、学会はどうあるべきか、また家族にとって学会はどうあるべきか、もう一度深く考えてみる良い機会となりました。知的障害者福祉の流れをみると、使用されてきた用語の変遷をたどってみるとその時代の雰囲気がいかに伝わってきます。

本人達を表現する言葉を振り返って見ると、(法律用語は別に)「白痴」「精神遅滞」「知的障害」、また施設の表現として「収容施設」「入所施設」「居住施設」「利用施設」等と変わってきているように見えます。この様な表現方法の変遷は知的障害者がその時代の社会の中でどのような立場におかれているのか端的にあらわれていると思

ます。また最近では在宅福祉という言葉よりも地域福祉という言葉がよく使われる様になってきました。

学会はオープン当初から、そこで生活している人達だけでなく、広く地域の福祉に役立つ事を目的としてきました。その表れが、地域療育事業の展開、グループホームの設置、通所部の開設と駆け足で歩んできました。ここで再度、現在学会で生活している療育生とその家族についてその理念をどの様に反映させていくか、それは一朝一夕には結論は出ませんが、平均年齢二十才の療育生達が、こここで生活していく事が本当に幸せなのか、常に自問自答しながら運営しています。(もちろん家庭には負けない環境づくり、雰囲気づくりは日頃から心がけているのは言うまでもありませんが)訓練・指導の時代から、生活しながら成長していくという考えで取り組んでいます。

障害者福祉を考える場合、あまり理想論に走り過ぎて進歩は少なく、逆に現実主義的、利己的になつてもより充実した生活は送れないと考えます。理想と現実の接点を模索しながら進む事が福祉現場に働く我々に課せられた課題だと考えます。具体的に療育生の進路はどうなのか、という問題は紙面の関係で次の機会に述べてみたいと思いますが、ただひとつ言える事はどのような環境におかれたとしても、一度利用された方達及び家族の皆さんが安心して生活していける環境づくり、バックアップ体制を整えていくことが責務と考えています。行政の立場・家族の状況・学会の役割、そして一番最初に考えなければならぬ療育生の生活・この四者の接点を模索しながら進んでいくように思います。

(ふる里学会 施設長)

交換研修を終えて

しもふさ学園 指導員 橋本 祥一

九月二十六日から十月一日までの約一週間、しもふさ学園として初めての交換研修という事で、ふる里学会の宮崎職員はしもふさ学園へ、また、私はふる里学会へ、それぞれに環境の異なる職場に足を踏み入れることになりました。

去る九月四日、職員同士によるバレーボール大会の交流試合が行われ、ふる里学会の皆様は下級までお越しいただき胸をかりました。他の施設との初めての交流試合で、私達しもふさ学園の職員はみんな緊張していました。特に私は、通って交換研修があるのだから緊張の度合いが増しているように思いました。試合の後の懇談会では、初対面であるにもかかわらず非常にとけ込みやすく、和やかな雰囲気の中で進み、会の終わるころには私自身の緊張も和らいでいました。

日か過ぎるのは早いもので、二十六日にはふる里学会を目指して出発、途中道に迷うこともありましたが無事に到着しました。そこでまず目に入ったものは、広い敷地と近代的な建物でした。施設長の案内で学会内を見学させていただきましたが、それは素晴らしいもので、合理的につくられた建物に私はカルチャーショックをうけました。

私の勤める施設は創立してから七年になりますが、今まで他の施設との交流が少なく、どちらかというと閉鎖的で、施設全体に外部からの刺激があまりなかったこともそう感じさせたのだらうと思います。さて、一週間カルチャーショックをひきずったままの研修でした。

が感想を述べると、設備等は申し分なく、六十名の療育生さんたちも(一年半にしては)たいへん落ち着いていて、日頃の指導の成果を感じさせられました。また、それぞれの部屋も整理されていて、療育生のプライバシーに関してよく考えられていて関心してしまいました。食事は質・量ともバランスよく、たいへんおいしく、和気あいあいとにぎやかな中で食事ができたことを嬉しくおもっています。作業面ではいろいろ試行錯誤なさっていたようですが、これから多様なアイデアを生かしてどんどん発展していくような気がします。

時間というのは本当に早く過ぎてしまふもので、あっ!というまの一週間でした。施設長を始め、職員の方々は手厚いおもてなしをいただき、たいへん感謝しております。有難うございました。これから、横のつながりとしてますます交流を深め、さらには他施設ともつながりをもち、よう「施設同士の輪」を夢見ながら筆を置くことにします。



福祉に対する意識改革と私の考え

私達年代の社会福祉に対する認識は、精神性を強調された時代背景のもとに生まれ育ち、福祉の世話になることを恥とする時代、社会的偏見や差別感覚の強い中で教育されました。現在、社会福祉問題が大きくク

ローズアップされる環境のもと、自分達の問題として認識されている人がどれだけのいるか、たとえ意識されていても表に現し行動に移す勇氣と、意識改革に戸惑いを感じ、難しく考えすぎていく我々年代の方が大勢いるのではないかと考えられます。

私も四十才前半までは福祉について、相互扶助(地縁、血縁による結び付き)に近い考え方でとらえておりました。しかしこれからは、社会福祉問題は決して私達の生活とは無関係ではなく、関わりが深い生活課題になってきています。それだけにどのような社会福祉観を持ち、それらの課題をどのように解決しようとしているのか、私達に問われている課題ではないかと考えます。

現在の社会状況を見るに、少子高齢化の到来、同居率の低下、経済の急速な発展による人間性の欠如など考えますと、地域住民の一人として社会福祉を考えたとき、自ら意識改革し地域社会に参加することの重要なことに気が付かないわけにはまいりません。

「自立と連帯の社会づくり」が社会福祉の目的でもあるように、社会福祉問題を自らの課題と受けとめ、「共に生きる」ノーマライゼーションの考えのもと認識を新たに、相互援助、行政との協力により良い社会福祉を考えていかなければなりません。

物の豊かさから心の豊かさへと、世の中は変わりつつあります。福祉はつまりは人と人との結びつき、言うは易く行は難いですが、私も心からの出発として心を伝え合うまで感動を求め、人のためではなく自己実現のために福祉活動することを大切にしたい。

NHK学園専攻科

(ふる里学会での研修を終えて、感想を寄せて頂きました。)

六月十九日、ゆうあいピック群馬大会、いま君がすばらしいのソフトボール千葉県代表選手に、ふる里学舎より岡正雄さんが選ばれました。数日後、施設長より「ゆうあいピック千葉県選手団看護婦に選ばれました。」と伝えられ、軽い気持ちで引き受けました。そのうちに素敵なユニホーム、靴、帽子が送られてきてビックリしました。ブルーのジャージに菜の花色で千葉、白い帽子にブルーでCHIBAと書かれています。

九月十九日、県庁内で選手三十七名、役員二十五名、総勢六十二名の結団式が行われました。みんなとおそろいのユニホームを着て、沼田知事よりお言葉を頂いた時、改めてこの重大さに気がつき、私にこの役が勤まるかどうか心配になりました。周りを見渡すとみなさんも緊張していました。

前日まで雨が降っていましたが、みなさんの行いが良いのか十月十三日出発当日は、さわやかに晴れ上がり、県庁に着くとみなさんの「おはよう、おはよう」と言う元気な声が飛び交い、バス二台に分乗し群馬・前橋に向かって出発しました。

千葉県選手団は伊香保温泉に宿をとり、十三日および十四日は練習したり、選手・役員間の交流を深めたりと、試合前の緊張感はあるもののリラックスした楽しい時間を過ごせました。

魅力の正体・・・

ちょうどこの季節、昨年初めて施設で実習したことを思い出します。(以前より福祉の仕事に興味を持っていました、全く未知の世界であったため人材センターに向き、そこで実習を勧められました。たかだか数日間でしたが、勤めるか否か大きな分かれ道になった気がします。

十一月、不安と期待の中、実習先である県内の入所更生施設に向かったのですが、すっかり肌寒くなった風がなおさら緊張感を高めました。そして一日目が始まり、その日はまるで嵐のように過ぎていきました。正直なところ現実離れした理想



いま君がすばらしい



私の部屋は職員三名を入れて十一名。さすが千葉県代表選手だと感心したことは、主催者側より頂いたプログラム等を早速めぐり、自分の出場種目の欄をチェックしていたことでした。

いよいよ開会式当日の十五日、前橋市内に入ると、至る所にゆうあいピックの開催を告げる横断幕や旗が見られ、歓迎ムード一色。また、ボランティアの方々の数には驚かされ、主催者側の熱意が伝わってきました。

高円宮同妃殿下をお迎えして盛大な開会式が行われ、いよいよ選手達が各会場に分散し競技が始まりました。学舎よりソフトボール選手として選ばれた岡君ですが、一回戦の対北海道戦では、緊張のためか普段の実力が発揮できず悔しがっていました。しかし、試合のほうはチームワークがものをいい三対二で勝ち、見事銅メダルを獲得しました。

以上、全国大会の雰囲気をお伝えしました。私にとっても、選手の方々にしても、とても貴重な体験だったと思います。この貴重な体験を、今後に活かしていきたいと思っています。

なお、来年度は兵庫県・神戸で開催されるという予定です。

看護婦 御園 美智恵

が頭の中にあり、実際とのギャップに考え込んでしまいました。冷静さなどどこへやら、ただひとつひとつをこなしていくのが精一杯でした。

そして短い期間の中、数々の事が起こり疲れ果てて研修がおわりました。それでもやってみたいと思わせ

た魅力みたいなものが、施設にはありました。そしてその一ヶ月後、再度人材センターへと向かいました。

そんな運びである里学舎へ勤め始めて、早半年以上が経ちました。毎日何かに新しい発見があり、やっばりやってよかったと、そう思っている。働くことができています。先日はある職員さんが、こうおっしゃいました。

「寮生さん達と関わっていると凄く素朴な気持ちになつてくるでしょう。」

それを聞いた時、何となく魅力の正体が一つわかった気がしました。

しかしながら、振り返りますと失敗も多く、現実はこの寮生の素朴な気持ちに助けられている毎日でもありません。福祉が特別な仕事じゃないんだ、甘えるなと先輩職員に叱られる事しばしばです。

何事も経験。この仕事の魅力が何なのか更に追い求めて行きたいと思っています。

指導員助手 富樫 一郎

山口さんの帰省日記

PART・II

十月八日

帰宅途中は例によりDマート。今回は乗り物のタクシーがいたので、先きのろうとすめたが頭としてきかず、順番通り乗っていった。下のスパーでひき肉大買いもいつも同様。(今回一個二五〇グラムのハンバーグが七個出来たそう)

帰宅後すぐ洗濯を始めた。(のだが、今回は三日間人がちよつと脱いだシャツ、たつた一枚のタオルでもすぐ水で洗って洗濯機に入れ、洗濯しろといっぱなしだった。このこだわり度こそはじめている) 午後は雑誌の付録づくりを妻にさせ、自分は座椅子にそっくりかえって、はなとそぼり。ときおり、ドロップの缶の中から自分の好みのドロップをさがして口にはこんでいた。はなとそぼる指と、缶の小さな口へつこみドロップをかきまわして取り出す指とは、同じ右の人さし指である。まあ自分が入れるのはよい。本人の鼻と口とは肉親みたいなものだから。だときおりとり出したドロップを、セツちゃん！と妻に食べと強要するのは、さすがにやを愛している妻もまいっていった。夜は一休さんカットをやり十二時までねばって就寝。

十月九日

朝十一時起きすも起きず、十二時起きてくる。またすぐ洗濯！終わって朝食、カレールイスと昨日作ったハンバーグ二個をベロリ！午後はコレクシヨンのおもちゃ遊び。夕刻、君津のおそば屋さんへ。昨日からの約束で、本人大いに楽しみにしていたもの。例により会食をとる。ところがなかなかたべださぬ。何だこりや、と思いつつ父が箸をつけたと、同じ物を食べ出す。妻が箸をつけると、それと同じ物を自分の膳からとって食べる、という変なことを始めたのである。しかし、結局刺身は三分、そばは二分、てんぷらは自分のぶんからひとつだけ、デザートのあんみつは二分、メロンは三分を食べて、終わるとまた飛び出していつてしまふようになったので、父、あわてておいかけける。で、まちがえてよその人の靴をはいてしまふ、父また店へ戻るという大さわぎを演じてしまった。店の人にわけを話すと(こうやはおれが大嫌いだ)

「では次から、ありがとうございまして」といわずに「いよいよにします」といつてくださったが、はなから恐がつて耳をふさぐのだから、同じことだろう。帰宅後はまた洗濯。我が家は洗濯でこうやが大声を出し、妻逆上している模様。行つて仲裁せねばならぬ。

編集後記

厳しかった夏の暑さの疲れからか、体調を崩す寮生が、昨年と比べるとこのほかが多かったようですが、涼しきともほかに、元氣を取り戻しました。訴えることの少ない寮生の健康管理には、より一層の目配り気配りをし、異常には素早い対応を！と痛感しました。さて、スポーツの秋真っ盛り、昨年の運動会でパンを目指して、脱兎の如く走り出したTさんの姿を再び見られることを願いつつ、「佑啓」第九号をお届けいたします。

指導員 奥山 淑子